



今月の便り

北海道の10月の庭仕事

10月の北海道は、日に日に秋が深まり、庭も冬支度の季節を迎えます。朝晩の冷え込みが強くなり、霜が降りる前に、植物の冬越し準備を始めましょう。

まずは1年草を整理し、枯れた茎や葉を取り除いて庭を整えます。

多年草は、地上部が枯れてから切り戻すものと、冬の間そのまま残すものがあるので、植物の性質を確認してから作業しましょう。宿根草の株分けや植え替を行う場合も、根がしっかり落ちてくよう、休眠に入る前のこの時期が適しています。

球根類の植え付けも10月の大切な仕事です。

チューリップや水仙などの秋植え球根も、この時期が植え付けの適期です。土を耕して元肥を施し球根の大きさに合わせて適当な深さに植え付けます。

北海道では、冬の凍結や雪解けによる浮き上がりを防ぐため、しっかり土をかぶせておきましょう。バラやクレマチス、紫陽花などは、品種ごとの冬越し方法を確認し、必要に応じて防寒対策をします。鉢植えは凍結しにくい場所へ移動し、水切れにも注意します。

冬を無事に越せるよう、早めの準備を心がけ、来春の芽吹きを楽しみに庭を整えておきましょう。(たかはし)

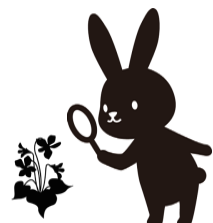
花の名前を調べてみては？

先日我が家のガーベラの鉢の中に別の植物が育っているのに気がつきました。

小さなときの葉の形が青紫蘇のようでてっきりシソだと思っていたら、25センチほどに伸びたところで小さなキク科らしい花をつけたのです。我が家の周りでは見たことのない雑草だったので調べてみると名前が判明。なんと「ハキダメギク」という植物でした。

このなんともイケていない名前は、東京のゴミ捨て場のようなところでこの植物をみつけた当時、こう呼んでいた牧野富太郎由来の名前だそう。熱帯アメリカ原産で「北海道の草花」(梅沢俊 著)にも載っているので、1930年代に記録されたところからじわじわ日本中に広がり今や北海道にも定着しているのでしょう。

それにしてもこの和名の名付けは、なかなかインパクトがあります。以前「クソニンジン」という植物名を見た時以来の衝撃でした。北海道も帰化植物が勢力を伸ばし在来の植物が激減している昨今。除草の際、見たことのない植物を見つけたらぜひ調べてみてください。もしかしたら面白い名前だったり、もしかしたらそこにしか残っていない絶滅危機の在来種を発見できるかもしれません。(きのした)

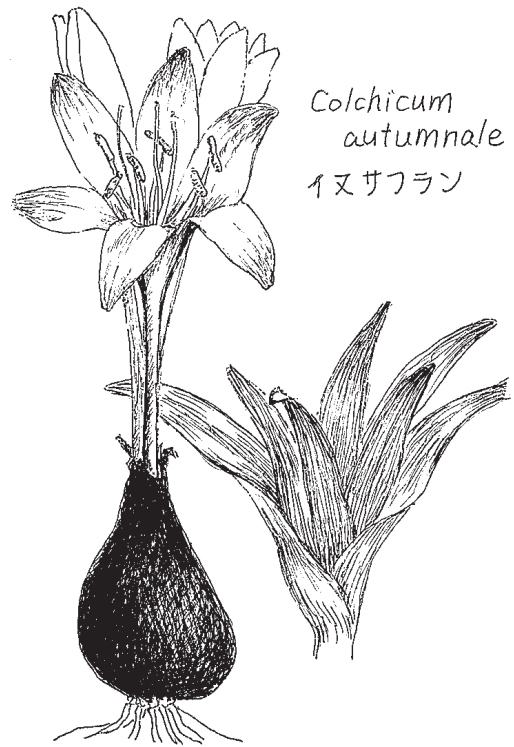


イヌサフラン

イヌサフラン（学名 *Colchicum autumnale*）はイヌサフラン科の植物でヨーロッパ中南部から北アフリカ原産です。（*autumnale* 秋の）の名前通り、秋に花が咲きクロッカスに似ているため、オータムクロッカスとも呼ばれます。名前にサフランと付き見た目もよく似ていますが、サフランはアヤメ科で全く別の植物です。花が少なくなる秋に咲き栽培が簡単なことから「コルチカム」という名前で園芸用に流通しています。

イヌサフランの球茎（球根）や葉、種子には植物全体に「コルヒチン」という猛毒を含んでおり、少し食べただけでも下痢や嘔吐、皮膚の知覚減退、呼吸困難などの症状を引き起こし、重篤な場合には死亡することがあります。この毒は、加熱調理しても変わりません。猛毒で知られるトリカブトよりも中毒例が多いのはイヌサフランの葉が食用の山菜であるギョウジャニンニクと間違えられることが多いためで見間違いを防ぐためにも花壇と野菜を植える畑は明確に区別しましょう。

イヌサフランは秋に花が咲き、その後に葉っぱが出て、梅雨時になると枯れて休眠するというサイクルで生育し、葉が枯れた後に掘り上げて土がなくても開花する特殊な性質があり、園芸品種としても楽しめる植物です。耐寒性が強く、何年も植えたままで開花します。（いとう）



庭のオオウバユリ

北海道などに自生するユリ科のオオウバユリ（*Cardiocrinum cordatum* var. *glehnii*）は、実に不思議で興味深い植物のひとつです。今から 15 年間ほど前に庭の片隅に種を蒔き、観察してきました。発芽して 5 年ほど経過した苗をひとつと掘り上げたところ、直径 5 センチほどの立派なユリ根（母鱗茎）になっていたのです。アイヌの人々はこれをすり潰すなどして、でんぷんを取り出し、食用、薬として利用してきたとのこと。

さて他の株は発芽してからおよそ 7 年後、5～7 月の 3 ヶ月で高さ 1.5m ほどになり、花後に長径 5 センチほどの果実（蒴果）が二十数個つきました。秋にはそれぞれが縦に裂けて、たくさんの種を飛散させました。このように数年かけて一度だけ開花し、果実をつけて本体は枯れます。興味深いのはここからで、この親株の根元に娘鱗茎（栄養繁殖体、ラメット）というユリ根の子供が幾つかできて、3 年ほどで果実を実らせました。

庭で育てていると面白い続きがあります。先の娘鱗茎が枯れた時にその根元に第 2 世代の娘鱗茎ができていて、3 年後に果実を実らせました。果実はわずか数個ほどになっています。さらに今年は去年の株の付け根から新たな茎が伸び、その先に果実をつけたのです。このように、飛散させた種子からではなく、栄養生殖だけで 10 年近く、子孫を残す強かさに改めて驚かされたのです。（かわはら）

ひとつき ひとバラ



文： 曾 根 浩 太
(いわみざわ公園バラ園)



第百四十二回

シュラブローズ

ラベンダーメイディランド

Lavender Meidiland

作出者：Michèle Meilland Richardier

作出国：フランス

作出年：2008 年

ハーディネスゾーン：不明 繰返し咲き

交雑：(Immensee × Flower Carpet® Pink) ×
Applejack

皆様のお庭でも秋バラは堪能できたでしょうか。今年のバラ園は例年より花が多いような印象を受けました。

今回は特に秋に惹かれるバラ、ラベンダーメイディランドについて紹介したいと思います。

ラベンダーメイディランドはフランスのメイアン社が作出しているメイディランドシリーズのバラです。

当園では、色彩館前のスクールガーデン等に植栽されています。ピンクの八重咲小輪のお花で、八重咲といっても20枚程度の花弁なので、開くと花芯がしっかりと見える花になっています。花付きが良く、あまり花が途切れない印象です。ただし、花芯が見えているため受粉がしやすく、一つの花の花もちそれほど長くありません。花びらは表が少し薄いピンク、裏が濃いピンクという表裏で色の違いがあり、その違いがくっきり表れるのが秋になります。表裏の花色の違い、黄色のしべ、赤い花芯が合わさってなんとも言えない可愛さになります。文章で伝える力がなくて悲しいです。初夏との違いがかなり顕著で、毎年ギャップに驚かされています。正直、一番花に関

しては個人的にあまりタイプではないですが、秋バラにはなぜか目が離せなくなるくらい惹かれています。

高さは90cm程度と低いですが、メイディランドシリーズらしく、横張りするタイプの樹形です。

その他のメイディランドシリーズと比べると強健性は少し低いような気がしますが、黒点病、うどんこ病等に強く、ADR認証も受けています。無農薬栽培をしている当園では秋までに半分程度落葉しますが、樹形的にあまり気になりません。

作出者の Michèle Meilland Richardier さんは、プチトリアノンやスーリールドゥモナリザをつくった方です。どちらの品種も耐寒性・耐病性に優れた品種ですね。当園でも成績のいい品種です。

ラベンダーメイディランド以外にも、秋は夏とは違った表情を見せてくれるバラが多数あります。思いがけない素敵なポイントを色々なバラで見つけて、ぜひ夏も秋も年間を通してバラの違いを楽しんでほしいなと思います。

今月の市民園芸講座のご案内



●10月11日（日）男結びをマスターしよう 13：00～15：00

参加費：無料 定員：40名 講師：バラ園スタッフ

●10月17日（土）ばらゼミ⑧ 10：00～12：00

参加費：無料 定員：40名 講師：古舘 杏奈 さん

～11月1日 9：00から 受付開始～

●11月14日（土）ローズヒップでクリスマスリースをつくろう

13：00～15：00

材料費：1,500円 定員10名 講師：バラ園スタッフ

●11月15日（日）多肉植物の寄せ植えをしよう 13：00～15：00

材料費：未定（広報11月号でご確認ください） 定員：20名

講師：椿 豊 さん

※お申し込みは講座開催月の1日（休園日の場合は翌営業日）

9：00～電話で受付しております。

※最新の開催状況についてはお電話かホームページにてご確認ください。

電話：0126-25-6111 ホームページ：<https://iwamizawa-park.com/>

※資料ご用意の都合上、なるべく事前のお申し込みをお願いいたします。

連絡なしの欠席・遅刻はお申し込みをしたい方のご迷惑となりますのでご遠慮ください。

※材料費のかかる講座は、講師の準備等の都合上、開催日3～4日位前までに
お申し込みをお願いいたします。

※換気の為、扉・窓等を開放いたします。悪天の際は暖かい格好でお越しください。